

# 平成二十六年 入学試験問題

## 国語

### 第三回

【注 意】

- ・試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・問題は一ページから六ページまでです。
- ・解答はすべて解答用紙の解答らんに入入してください。
- ・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

① 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

二人の人間がいて、お互いが意見を述べ合っているという状況では合意に至ることは容易ではありません。そのようなときにユウヨウなのが、第三者としての「調停者」です。しかしながら、日常的な場面ではそのような立場の人がいない場合のほうが多いでしょう。そのときに必要となるのが、「自分が調停者になる」ということです。もちろん、あなたは当事者ですが、それとは別の立場で自分と相手の立場を把握し、調停するという役割を自分の内部に置くことが可能です。

自分の内部に調停者を作るのは、それほど難しいことはありません。(2) 少しの練習で、誰でもそれができます。まず自分の言動を可能な限り言語化していくということに務めます。簡単に言うと「今、自分は議論をしている」と内心でつぶやくことです。この練習は、一人でいるときに始めるのがよいでしょう。もしも「今」のことであるなら、「今、私は本を読んでいる」ということになるでしょう。もちろん「私」の場合は、「今、私は、本を書いている」ということになります。最初は、明確な行動についての言語化から始めます。これがうまくいくようになるのはすぐですが、それが十分にできるようになったら、次に、「感情」や「自分の状態」について言語化していくという段階に進みましょう。「今、私は少し眠くなっている」とか「私は、少し原稿を書くのに飽きてきた」とか、「この本を読み続けるのが面倒になってきた」などです（そうでないことを祈ります）。この練習も、思い出したときにやってみるということを数日続けるだけで、ゲキ的にうまくできるようになります。おそらくこれは、人間に元から備えられている機能ではないかとさえ思えるほどです。というよりも、実は、多くの人は既にそのようなことを行なっているはずで。

心の中に調停者を作るといえるのは、簡単に言うと「第三者の視点を持つ」ということです。これは、このように「自分の行動や感情や置かれている状況を、言語化していくこと」によって達成されます。この言語化の練習が十分に進んだら、次に、自分を「三人称」で呼ぶ（内心で）練習をしてみましょう。「私は疲れている」ではなく「コイツは疲れている」という具合です。もちろん、「コイツ」ではなく「この人」とか「この男」「この女」を使ってもいいでしょう。そうすると、**A** 自分のものであっても、推測に基づいた言語化が発生したりするようになります。「コイツは今、疲れてい

るんだろうな」「この女は、今、本当に喜んでるのかな？」などという具合です。もちろん、否定的なことばかりではなく、「コイツは今、幸せのゼツチヨウにいるね」「この男は心底喜んでるな」といった言語化も発生するでしょう。

そのような訓練が十分に積まれると、「自分を客観的に見る視点」が、自分の内部にできあがります。**B** その視点に調停者としての役割を付与することができます。

自分の内部に調停者が形成されると、次の新しい段階に踏み出すことができます。それは、「自分の内なる調停者」が、「自己」とのあいだで調停を行うという段階です。

私たちは「自己」とのあいだで十分な合意や了解が得られないままに、ある行動をとってしまう場合があります。そのようなとき、それが自分の行動にキーンするものであるにもかかわらず、その場所に存在していることに腹が立ったり、自分の状況に不満を持つたりします。それは、「自己」という「自分の内部にいる他者」とのあいだで了解が形成されていないことにより、**C** 「内なる調停者」が十分に機能しているのであれば、その調停者は、「自己」とのあいだでも調停を図ることができます。

私たちは、実は自分の思考や感情のことをよく知りません。**D** レストランで食事が出てくるのが遅いだけで腹が立つのがどうしてなのか、自分でもよく理解していないはずで。そのようなとき、それをしっかりと了解するためには、内なる調停者が、自己に対して、無知のアプローチや★アクティブ・リスニングなどの★スキルで接近する必要があります。少々特殊な状況ですが、「私は、私（自己）のことをもっとよく知りたい」という接近法です。

了解についてのスキルだけではなく、ここまで習得してきたすべてのコミュニケーションスキルは、「自己」とのコミュニケーションにおいて有効です。あなたは「自己」を説得したり、また「自己」と交流を深めたり、「自己」を受容したりできるはずで。実は、コミュニケーションスキルにおいては、この「自己とのコミュニケーション」が極めて重要です。あなたは、まず「自己」を了解し、「自己」と合意し、「自己」と和解しなくてはなりません。そうしておけば、自分の行動にキーンすることで腹を立てたり、不満を感じたりすることはなくなります。その意味でも、「内なる調停者」の役割は重要です。内なる調停者の形成は、自分以外の人間とのあいだで

了解を形成するうえで重要ですが、それをはるかに越えて、自己を了解し、自己と合意・和解するための手段として極めて重要なことであるとと言えます。

自己と合意・和解していない人間が、他者とのあいだで「イギのあるコミュニケーション」をすることは難しいと言えます。しかし、そのために「内なる調停者」の形成が必要なのですが、それは容易なことではありませぬ。「自己と合意する」という概念を考えてみれば、その困難さはわかるはずです。

「自己とのコミュニケーション」と「他者とのコミュニケーション」は、車の(5)のように、どちらがかけてもうまくいきません。内なる調停者を形成し、そのうえで、他者とのあいだでイギのあるコミュニケーションを多く経験しながら、それを鍛えていくことが必要となります。

(高田明典『コミュニケーションを学ぶ』)

75

★務めます……………通常は「努めます」だが、原文に従った。

★三人称……………話し手(わたし)、聞き手(あなた)以外の第三者を指示する、人に対する呼び方。「彼女」など。

★無知のアプローチ……………「その人が知っていることを、私は知らない」という前提で会話を進行すること。

★アクティブ・リスニング……………ただ聞くだけではなく、ところどころで相手の話を繰り返したり、質問したりすることで、話を促す積極的な聞く態度。

★スキル……………技術。

問一 — (1) 「調停者を作る」とありますが、ここでいう「調停者」とはどのような役割ですか。本文の表現を用いて三十五字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問二 — (2) 「少しの練習」とありますが、どういった練習ですか。本文の表現を用いて七十字以内で具体的に説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問三

— (3) 「言語化」とありますが、ここでいう「言語化」とはどういうことですか。本文から十字以内で抜き出しなさい。(句読点は含まない)

問四

— (4) 「私たちは『自己』とのあいだで十分な合意や了解が得られない」とありますが、「自己」とのあいだで十分な合意や了解を得る」というのはどのようなことですか。本文の表現を用いて二十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問五

(5) に入れるのにもっともふさわしい漢字二字の熟語を自分で考えて書きなさい。

問六

A 〽 D に入れるのにふさわしいものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば    イ そして    ウ もしも    エ たとえ

問七

— (ア) (オ) のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「自己とのコミュニケーション」を行うためには、「他者とのコミュニケーション」を十分に理解し実践を積み重ねなければならない。

イ 「他者とのコミュニケーション」も「自己とのコミュニケーション」も、ともに重要であり、二つとも欠くことのできないものである。

ウ 「自己とのコミュニケーション」を行う前に「自分の内なる調停者」を形成しなければならないが、多くの人は既に行っている。

エ 「自己とのコミュニケーション」の前段階で「自分の内なる調停者」を形成するためには、強い個性と意志を持つ必要がある。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

二月十四日。わたしがチョコをあげる人はただ一人。優美みたいに、オヤジにやる気なんてないし、クラスでだれかれとなくチョコを配るほどマメじゃない。

カバンに六花亭のチョコを持って出かける。いつになく緊張していた。何ていって渡そうかな。師匠、義理チョコだぜ。でも違う。義理なんかじゃない。じゃあ、何だ？ 感謝？ だって、明野工房があったから、わたしはここにいられたのだから。

「ちわ」

ドアを開く。そして、わたしは固まった。文字どおり固まった。デンさんは、作業台の椅子に座っていた。それは見慣れた光景。だけど、すぐそばに女の子が立っていた。小学校の三年生ぐらい？ それがだれだかすぐにわかった。顔がデンさんによく似ていたから。

「おう、美楽」

と、デンさんは気楽に声をかけてくる。

「こいつは……」

いいかけた言葉を遮る。

「師匠のお嬢でしょ」

女の子は、だれ、この人？ というふうに見上げる。目がデンさんにそっくり、なのにかわいい。

「明野伝造さんの弟子です」

わたしは笑う。ぎこちなく。

「娘がわざわざ、チョコ持ってきてくれたんだ。美楽も食うか」

わたしと娘はたぶん、<sup>(1)</sup>同時にムツとした。ばかやろ。

「だめじゃん、大事に食べなきゃ。椅子、持ってくよ」

「ああ。それ、どうすんだ？」

「山田にやる。これから持っていく」

「そうか」

そのまま、建物を出る。外に見慣れない車があった。 A したシルバークレーの車。さっきは何で気がつかなかったんだろう。まわりのことが目に入ってなかったんだな。それほど緊張してたのに、<sup>(2)</sup>空振りです。美楽のばか。

30

25

20

15

10

5

車の中に人影が見えた。女の人だ。元ツマ、かなと思つた。たぶんそうだろう。それがどうした？ 声を出してそうつぶやいた。

複雑だった。泣きたいような、笑い出したような不思議な気分だった。

山田の家は山と田に挟まれていた。しゃれじゃあるまいし、と思つてちよつと笑つた。<sup>(3)</sup>無理に笑つた。谷あいの狭い田んぼ道を、小さな木の椅子を B とぶら下げて歩く。

二月にしては暖かで、空もすっきりと晴れわたつていた。でも、青空というのとは違う。夕方間近の、ちよつとだけ黄がかった色の空だ。山の中は日が沈むのが早いのだ。そんなことも、気がつかなかったな、最初のころは。きらきらした人工的な色には縁がない、どこまで見渡しても自然の色。その自然な色の空が澄んできれいで、わたしはどうしようもなく悲しかった。

山田の家の庭にはにわとりがいた。やつぱしゃれか。庭には二羽にわとりが、なんてばかなことをいいながら、縁側に座っていたばあさんに声をかける。

「こんにちは」

「はい、こんにちは」

にこにこ笑顔のばあさんが挨拶を返してくれた。それから、すぐに部屋の中に向かってびっくりするぐらい大きな声で、山田を呼んだ。

「篤史！ お客さんだよ。ほれ、センセイのお嬢さん」

な、何で知ってるんだ。けど、わたしはお嬢さんなんて、もんでは……。いつてもしょうがないか。

すぐに縁側に出てきた山田は、上がれ、というふうに顎をしゃくつた。

「ばあちゃん、お茶淹れてくれ。それから、饅頭、あつたか？」

そんなもん、いらん。ばあさんが引つ込んだ隙にいった。

「すぐ帰るからいい。遅くなるし」

「遠慮するな」

遠慮ではない。

「ちゃんと送っていくから」

「山田、チョコもらえたか？」

「あたぼうよ」

にんまり笑つて指折り数える。そんなに人気があるとも思えない。「でも、まだミラクルから届かないけどな」

60

55

50

45

40

35

「そんなもん、ない」

本当は、カバンの中に、渡しそびれた六花亭のチョコがある。でもこれを山田にはやれない。やっぱり、デンさんにあげたい。あげられないくらいだったら、自分で食う。

山田がマジでがっかりした顔になったので、ちよつとあわてた。

「かわりに、これを作った」

にゅつと、椅子を差し出す。山田がおずおずと<sup>(4)</sup>手を差し出す。

背もたれの部分は曲線でカットした。中に葉っぱの模様を切り込んだ。

C とそれを見つめ、山田はいった。

「ミラクル、★電ノコ、うまくなつたなあ」

ばあさんがお茶と饅頭を持ってきた。

「いつも、篤史がお世話になってます」

「はい」

と、正直に答えた。何しろ我が家にしょっちゅう入り浸っている。ばあさんは楽しそうに笑った。

「いつもいつも、センセイのお嬢さんの話ばかりしとるですよ、こん子は」  
照れたように山田が頭をかく。わたしは遠慮なく饅頭を食った。お茶は渋くて苦かった。

あたりに闇が降りてくる。山の夜は急におとずれるのだ。そして気温も一気に下がり始める。わたしは縁側から降りて、ばあさんにぺこりと頭を下げた。

「ごちそうさまでした。帰ります」

「送る」

山田は短くいって、部屋の中に消えた。そして十五秒後に、玄関から出てきた。

山際の近くはまだほのかな明るみを残しているが、見上げる空の藍色はだいたい濃い。濃いのに、澄んでいると思った。星がちかりちかりと瞬き始める。山田はわたしの一歩前を歩いている。その背中に向かって、声には出さないまま、問いかける。知ってるか。わたしの名前、恒星なんぞ。デンさんにも、まだ話してなかった。あの子、どうしたろう。もう帰ったのかな。デンさんの娘……。

ふいに山田が振り向いた。

「椅子、ありがとな」

65

「チョコでなくて悪かったな。でも、たくさんもらったのならいいか」

「義理チョコばかりだよ」

「そんなこともないだろう」

「そういえば、思いがけないところから、もらった」

優美のことかな。でも、聞かなかった。山田もいわなかった。

「なあ、ミラクル」

「ん？」

「峯川村に、来てよかったか？」

「……微妙」

山田は笑った。ちよつと乾いた笑い声がちぎれて、夜空に飛んでいく。

「前は、ソッコウ否定したよな」

「認める」

「一学期はよ、いつもいつもふてくされたような顔でさ、先生……オヤジさんにも怒ったような口ばかりきいて、おかしかったよ、おまえ」

「そうか？」

「けど、初音と、何かおもしろいよね、先生の子っていつてたんだ。何ていうのかなあ、顔見ると飽きないっていうか」

失礼なやつらだ。百面相やってるわけじゃあるまいし。

「何に興味示すわけでもないし、脱力系っていうか、無気力なガキと思っ  
ていたら、いつの間にか木工にのめりこんじまって。女の子なのに。けっ  
こうサマになつてきたぞ、カンナ掛け」

その言葉は素直に嬉しかった。

「そうか」

「そうか、ばつかりだな。けど、おれに会えてよかったな」

「そうかあ？」

「まったく、かわいいげのない」

笑いながら、山田はほんと大きな手で、わたしの頭を軽くはたく。そして足を止めて、正面からわたしを見る。わたしも山田を見上げる。山田がふいに真顔になる。

「ミラクル、ここを忘れるなよ」

「うん、忘れない」

□心だ。忘れない。

「おれのこと、忘れるなよ」

100

105

110

115

120

125

130

「……うん」

「その間はなんだよ」

山田は、わたしの額を小突いた。小突いたまま、その手を頭に載せる。

「おれはね、ミラクル、おまえは知らないかもしれないけれど、おまえのこと、大事に思っているんだ。妹とか、ほしかつたし」

わかっている。そんな気がしていた。

「山田は末っ子だしなあ」

「誤解するなよ。だからって、妹のようだなんて思ったことはない。っていうか、おれの妹だったらもつとかわいいはずだ」

否定できないところがつらい。

「でもな、ミラクル、おまえは、おれのこと、兄貴みたいに思ってもいいんだぞ」

「……うん」

小さくうなずいてから、山田を見上げた。

「離ればなれになっても、そのこと、忘れるなよ」

じつとわたしを見つめる山田の目が、D輝いていて、その目を見

ていたなら、何だか胸が苦しくなってきた。

「今生の別れのようだな」

わたしの言葉に、山田は吹き出した。

「おまえ、ほんとに変なガキ。妙な言葉知ってるよな。でも、就職の準備もあるから、しばらくミラクルの家にも行けない。免許ももう少しかかるし。春だつていうのによ」

「そうか」

何もいえなかった。山田だけじゃない。こうしてわたしが、ここを去っていく。もう会えないかもしれない人たち。ふいに、デンさんの言葉がよみがえる。何か残していけ。

ベンチを作ろう。最初に気に入った、つるつるのベンチ。それを峯小に残そう。

「山田」

「何だ」

「あたしは……」

ベンチを作って、この村に……。言葉が続かない。ごめん、山田。それをわたしは、やっぱりデンさんにいちばん最初にいいたいのだ。

160

155

150

145

140

135

「山田に、<sup>★</sup>糸ノコで大笑いされたことを忘れないから」

「何をいうかと思つたら、これだよ。まったくおかしなガキ」

「悪かつたな」

「だけど」

山田が口元にやさしい笑みを浮かべる。こんなやさしい顔、初めて見るような……。

「大好きだよ、ミラクル」

わたしの体が山田の大きな腕に包まれた。でも、それはほんの一瞬のこと。

「じゃあな」

山田はもうかけだしていた。わたしはその背中を見送った。<sup>(6)</sup>ごめんな、

山田。ありがとう、山田。

(濱野京子『木工少女』)

175

170

165

- ★ミラクル……美楽のあだ名。
- ★電ノコ……電動ノコギリ。
- ★糸ノコ……糸ノコギリ。
- ★今生の別れ……これで一生会えない別れ。

#### 問一

——(1)「同時にムツとした。」とありますが、このときのデンさんの娘と美楽の気持ちの説明としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア デンさんの娘は、父親自身に食べてほしいのに、当たり前のように他人にチョコレートを食べさせようとする父親に呆れており、美楽は久しぶりに会ったであろう娘さんに対して普通に会話するデンさんに嫌気がさしている。

イ デンさんの娘は、せっかく父親に渡したチョコレートなのだから大事に食べてほしいし、美楽も娘さんの気持ちがかかるので、その気持ちを台無しにするデンさんの発言に腹が立っている。

ウ デンさんの娘は、久しぶりに会った父親ともっと話してたいのにそれを邪魔する美楽の存在に腹が立っており、美楽も師匠であるデンさんを娘さんに奪われたような気がして、この状況を腹立たしく思っている。

工 デンさんの娘は、自分が父親にチョコレートを持ってきていて、  
いうことを見知らぬ美楽に対して平然と打ち明ける父親のことを  
煩わしく思っており、美楽は自分も娘さんと同じチョコレートを  
あげるつもりだったことに対してどこか恥ずかしく思っている。

問一 —(2)「空振りです。」とありますが、これはどういうことですか。八  
十五字以内で具体的に説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを  
用いること)

問二 —(3)「無理に笑った。」とありますが、このとき的美楽の様子  
の説明としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えな  
さい。

ア デンさんにチョコを渡せず悲しいはずなのに、自らの口から思  
いもよらないしゃべりが飛び出し、そのしゃべりがことのほか面白  
だったので、驚きながらも素直に楽しんでる。

イ デンさんにチョコを渡すことが出来なかったことに対して悲し  
んでいるが、たまたま思いついた大して面白くもないしゃべりに無理  
やり笑うことで、自分の気持ちを紛らわそうと試みている。

ウ デンさんの工房の外に見慣れないシルバークレーの車があったこ  
とにさえ気づかないほど緊張していた自分のことを思い出し、恥  
ずかしさが増し、自らを馬鹿にしている。

エ デンさんに渡すことの出来なかった六花亭のチョコをこのままで  
は山田にあげることにしようだと考え、この予期していなかつ  
た状況を笑うことで楽しもうと、自らを奮い立たせている。

問四 —(4)「手」とありますが、「手」を使った次の一～五の慣用句の意  
味を後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 手を入れる      二 手が出ない      三 手が込む  
四 手に負えない      五 手につかない

「意味」

ア てまをかけて、細工が細かい。

イ 自分の力で始末できない。

ウ ほかのことが気になっておちついておられない。

エ 作品などの悪いところやふじゅうぶんなどところをなおす。

オ どうにもやりようがない。

問五 —(5)「心」は「いつわっていない心」という意味の熟語です。  
にあてはまる漢字一字を書きなさい。

問六 —(6)「ごめんな、山田。ありがとう、山田。」とありますが、このと  
き的美楽の気持ちを八十五字以内で説明しなさい。(句読点も含み、  
必ず一マスをを用いること)

問七 A D に入れるのにふさわしいものを次のア～エの中か  
ら一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア きらきら      イ しげしげ      ウ ぶらぶら  
エ ぴかぴか

問八 本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えな  
さい。

ア 美楽は工房のドアを開けてデンさんの横にいる女の子を見たとき  
からすぐにそれがデンさんの娘だとわかり、それによって建物の  
外の車にいたのはデンさんの元奥さんだということに気づいた。

イ 山田の祖母は美楽を見てすぐには誰だかわからなかったが、美楽  
の声を聞いたことよって美楽のことを理解し、すぐに山田を縁  
側に呼んだ。

ウ 美楽は山田が自分のことを妹のように思ってくれていたという気  
持ちに以前から気づいていたので、山田の妹であればもつと素直  
に振舞わなければいけないと常に気にしていた。

エ 美楽は村に来た当初はなかった村への愛着が木工をきっかけに芽  
生え始め、遂には峯小に自作のベンチを残そうという決意をした。

